池田屋事件の研究

中村武生

講談社現代新書

2131

池田屋事件の研究

中村武生

常州大学図書館
藏書章

講談社現代新書
2131

N.D.C.210.58　414p　18cm
ISBN978-4-06-288131-9

講談社現代新書　2131
池田屋事件の研究
二〇一一年一一月二〇日第一刷発行

著　者　中村武生　© Takeo Nakamura 2011
発行者　鈴木　哲
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電　話　出版部　〇三―五三九五―三五二一
販売部　〇三―五三九五―五八一七
業務部　〇三―五三九五―三六一五
装幀者　中島英樹
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価はカバーに表示してあります　Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。R〈日本複写権センター委託出版物〉
複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。

目次

はじめに――3

第一章　古高俊太郎の「発見」――15

実証性のない古高伝／古高書翰の謎／発見された供述書／否定された御所向放火計画／「書付写」を検討する／矛盾する二つの供述／「古高周蔵」の記載／毛利家との血縁／奇跡の出会い／「書付写」はホンモノだ／金沢で古高関係文書見つかる／古高宛書翰の価値とは／信用できる古高関係文書／明らかとなる政治史の裏側／奉勅始末書問題／寺島忠三郎の山口入り／父周蔵の記録／梅田雲浜との深い関係／古高父子と毘沙門堂／桝屋喜右衛門を継承／和宮の姉敏宮／キーマンとしての慈性法親王／慈性法親王の准三宮宣下／由緒書に込められた古高章の意思／初めての史料群／真町文書から何がわかるのか／桝屋の相続問題／古高は七代目

第二章　池田屋事件への政治過程

一代限りの相続／不穏な政治情勢／島津久光と寺田屋事件／文久の政治改革／殉難者の慰霊／大高又次郎の来歴／「伏見要駕策」とも関係した大高／具足師としての大高／播州姫路や赤穂とのつながり／注目すべき大高の存在／暴走をはじめる長州／池田屋事件を誘発したもの／七卿落ちと宮部鼎蔵／関東は滅びてもいい／なぜ長州は率兵上京しなければならなかったのか／「正義党」の崩壊と復活／京都から排除される長州／生野の挙兵と井原の上京／挙兵上京論の三つの策／突出する来島又兵衛／長州征討が話題となる／当面の対長州方針／「天誅」が与えた心理的圧迫／島津久光の「悪だくみ」／率兵上京へと雪崩を打つ長州／高まる緊張／長州使者の入京に理解を示す諸侯／まとまらぬ会議と久光の「嘆きの日記」／一橋慶喜のサボタージュ／諸侯会議の解散／揺れる御進発方針／「一大挙」のもくろみ／長州派の巻き返し／一・会・桑のそろい踏み／方針転換する久坂玄瑞／中川宮殺害の危機／世子進発を決定／京都を離れる諸侯／複数の浪士の計画を伝える桂小五郎書翰／宮部・中岡・北添・古高らの「計画」／栂尾会議で何が決まったのか／将軍護衛のため浪士集団を結集／新選組誕生ともう一つの道／実現しなかった攘夷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章　池田屋事件起こる

古高に近づく長州関係者／松山忠助は長州の間者か／長州の諜報活動／情報センターと化した古高邸／桝屋に踏み込んだ新選組隊士は／新選組による古高の取り調べ／「放火」と「天皇奪取」の噂はあった／現実味を帯びてきた「噂」／新選組は浪士の潜伏場所を探知していた／会津松平家の慎重な対応／会津松平家の出動／乃美手記を検討する／写本五点、異本一点／桂小五郎は池田屋にいたか／屋根を伝って逃れた／写本の系譜／乃美にとっての池田屋事件／事件当時の長州屋敷／「小戦」は差止め／古高奪還の動き／宮部鼎蔵の動向／吉田稔麿は古高奪還に向かったのか／吉田の行動を記す別の記録／古高奪還メンバーではなかった／和平交渉を申し出る吉田稔麿／徳川政府からも信頼された吉田／吉田は江戸に行く途中だった／新選組の「ローラー作戦」説／浪士の潜伏先をつかんでいた／新選組の実働者は三十人のみ／明らかではない新選組の顔ぶれ／推定メンバーの当否／奥沢・安藤・新田は戦死したのか／確定できるメンバー／「池田屋見取図」は信用できるか／池田屋跡地は特定できるのか／「階段落ち」はフィクション／新発見の野老山調査報告書／襲撃場面を復元する／沖田総司は病気で離脱／重傷を負った藤堂平助／永倉新八の奮闘／約二時間の戦闘／土方組の合流／じつは特定できない戦死者／会津家臣らの参戦／長州と合戦に及ぶつもりだった会津・桑名／長州屋敷にもたらされた凶報

／杉山は誰に斬られたのか／杉山と吉田稔麿は同行していたか／同行した証拠は他にない／戦死者を記す文書／淵上謙蔵も池田屋の受難者／収容された遺体は稔麿か／乃美手記に見られる政治的配慮／長州屋敷にいた百人を超える人々／臨戦態勢の長州屋敷／吉田稔麿の殺害地

第四章　戦闘終息後

茶屋で捕縛・殺害された毛利家家臣／山口に届いた池田屋情報／逮捕者の釈放に奔走する乃美／把握できていなかった宮部のゆくえ／九死に一生を得た浪士／土佐山内家の情報収集／野老山調査報告書の全貌／報告書の情報源は／二つの史料を比較する／藤崎八郎の供述／なぜ藤崎と野老山の供述は一致しないのか／伊藤善平の書翰／北添は古高奪還計画に加わっていた／新選組・会津松平家のその後の探索／「大仏」とはどこか／龍馬らの居宅が襲撃される／「大仏組瓦師」の久板五郎兵衛／楢崎龍の母を捕らえ家財道具を没収／龍馬は江戸で何をしていたのか／蝦夷地開発計画の挫折／戦死者は「北方計画」の参加者？／「北地策」と禁門の変／大高宅も襲撃される／革具足製造所の実態／桝屋の規模を検討する／襲撃当日の逮捕者記録／十六人に共通するもの／西川耕蔵の逮捕／尹宮殺害計画をめぐる古高の供述／肥後を代表する浪士松田重助／不確かな足取り／松田逮捕の経緯／いかなる最期か／改葬の謎

第五章　池田屋事件から禁門の変へ

墓銘碑に記された池田屋での戦死者／河上彦斎の「建碑」活動／五人のうち二人は間違い／三縁寺住職の証言／池田屋下女の証言／吉田稔麿の遺体が葬られた霊山とは／殉難者慰霊のさきがけ／文久二年の合同慰霊祭／在京殉難者の埋葬場として／霊山に葬られた池田屋戦死者は／三縁寺に最初に建てられた墓碑／再発見された三縁寺墓碑／殉難者顕彰運動と新たな建碑／二十世紀にも建碑は続く／なぜ発掘調査報告書が見つからないのか／略測図に記された出土遺物／発掘調査の実態／事件関係者の遺骨なのか／事件後の逮捕者／ほとんどは池田屋にはいなかった／明保野亭事件に見る会津・新選組の危機意識／長州国元の様子／桂と乃美の連携／五卿にはもっと早く情報が届いていた／即時出兵をめぐる通説と異なる対応／高まる軍事的衝突の可能性／京に迫る長州勢／合戦目的ではない／獄中の死者／池田屋惣兵衛と手代彦兵衛／一・会・桑権力確立の時期／禁門の変以後の混乱／竹林寺への埋骨／多くの「枯骨」が出た／確かな埋葬者は二人だけ／高まる新選組の評価／長州征討にシフトする／一・会・桑の最重要軍事力／西川耕蔵とその係累／西川太治郎の一族探査と顕彰／建碑に尽力した寺井萬次郎／子母沢寛が発掘した新選組

まとめ 397
あとがき 409

池田屋事件の研究

中村武生

講談社現代新書

2131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

本書は新選組で有名な池田屋事件の検討をテーマとする。

ただし新選組ではなく、斬られた側、すなわち長州毛利家側からとらえようというところに特徴がある。では、それにはどんな意味があるのか。

池田屋事件は、元治（げんじ）元年六月五日（一八六四）に起きた。そのころは各所で攘夷浪士たちによる挙兵があいついでいた。大和（やまと）の天誅組（てんちゅうぐみ）の乱、但馬（たじま）生野（いくの）の変、水戸の天狗党の乱、長州毛利家の率兵上京（のちに禁門の変とか蛤御門（はまぐりごもん）の変とか呼ばれる戦いになる）などをさす。

では、これらの挙兵の究極の目的は、いったい何だったと理解されてきたか。

これまで多くの研究では、それは徳川将軍とその政府（幕府）を打倒すること、すなわち「討幕（倒幕）」のためとされてきた。たとえば維新史研究を牽引してこられた井上勝生氏の『開国と幕末変革』を読むと、「攘夷・討幕の『天誅組』を結成」とか、同じく生野の変を「天誅組に連携する攘夷・討幕挙兵を計画」とある（〈日本の歴史一八〉講談社、二〇〇二年、三〇七頁）。本書を手にとっていただいているあなたはいかがでしょうか。やはり多

くの方がそう思っているでしょう。すなわち攘夷論者は、「討幕（倒幕）」を考えていたと。が、近年それが揺らぎだしている。

実際に「討幕（倒幕）」が成るのは、慶応（けいおう）三年十月（一八六七）の大政奉還、あるいは十二月の王政復古政変、もしかしたら翌年一月の戊辰戦争勃発かもしれない。このあたり、そもそも「討幕（倒幕）」とは何をさすのかによってまた評価が変わってくる。

問題はこのときの「討幕（倒幕）」の主人公であった薩摩・長州の代表者たちは、いったいいつごろからそれを志したのか、ということだ。じつはこれがいま、維新史研究の大きな話題のひとつとなっている。先を急ぐと、個々の研究者の見解に若干の相違はあるが、おおむね慶応三年六月ごろ、という結論になっている。

えっ、慶応三年六月って、大政奉還の四ヵ月前じゃないか。そうです。

じゃあその前年、坂本龍馬の活躍で知られる慶応二年一月の薩長同盟は、「討幕（倒幕）」のための軍事同盟じゃないの？　そういうことになってしまいますね。

じつはこれも個々の研究者によって見解の相違があり、薩長同盟は「討幕（倒幕）」をめざした軍事同盟かどうか、けっこう熱の入った論争になっている。歴史作家の桐野作人氏がその論争をわかりやすくまとめてくださっているので、関心をお持ちの方はぜひそちらをご参照ください（「薩長同盟研究最新動向――同盟の実相と龍馬の果たした役割とは？」『維新創世

坂本龍馬』、学習研究社、二〇〇六年）。

話が長くなってきた。本書の目的に戻る。

ここまで維新史研究の世界では、「討幕（倒幕）」への志向を慶応二年一月の薩長同盟からみとめるか、翌慶応三年六月ごろを画期とみるかが問題になっているといった。それなら最初に話題にした、天誅組の乱や生野の変、禁門の変などはどう評価すればいいのか。これらが起こった文久・元治期（一八六一～一八六五）は、慶応二年から数年のひらきがあるのだ。それでも、これらを攘夷はともかく、「討幕」をめざした挙兵と理解していいのか。この研究上のギャップをいま問題にしなければならない。

主題である池田屋事件も、ある挙兵が前提になっていて、それが新選組などにより未然に防がれたものとされている。すなわち、長州毛利家の率兵上京である。それに先だって、一部の攘夷浪士グループが京都市中に放火し、中川宮（尹宮）朝彦親王や京都守護職会津侯松平容保らを殺害、孝明天皇を長州へ連れていこうと考えていたという。一般にはこの動きも「討幕（倒幕）」計画の一環と理解されることが多い。

京都市中京区の池田屋跡碑のそばには、地元の商店街が立てた事件の解説板がある。そこに「倒幕派がクーデターを起こ」そうとした、その挫折により「倒幕が一年遅れたといわれる」とはっきり書いてある。

なぜここで、路傍の解説板の表記をとりあげるのか。専門研究者の発表した著書や論文を話題にしないのか、と読者は思われるかもしれない。

じつに意外なことだが、少なくともこの数年以前、専門の歴史研究者はまったく池田屋事件の研究をしてこなかった。それはすなわち、文久・元治期の挙兵事件（未遂も含む）のなかで、もっとも事実解明の遅れている事件のひとつだということだ。

でも、新選組の本には池田屋事件のこまかい記述が載っているよ、二〇〇四年のNHK大河ドラマ「新選組！」のころにはたくさんの新選組の本が書店にならんでいたよ、そういう声が聞こえそうである。たしかにそうだ。が、その大半は、新選組に叙述の多くがかたよるか、戦前の著作の内容を無批判に塗りなおしたに等しいものだった。

ちなみにここでいう戦前の著作とは、西川太治郎『池田屋事変殉難烈士伝』（一九〇四年）、子母沢寛（しもざわかん）『新選組始末記』（一九二八年）、同『新選組遺聞』（一九二九年）、寺井維史郎『池田屋事変始末記』（一九三一年）などである。記載内容の実証性の問題も大きいが、そこには戦前の価値や意識が強く生きている。殉難者たちが、将来実現する「討幕（倒幕）」の先駆として位置づけられている。それを現代の研究がそのままうけついでよいのか、ということである。

いかに現在、池田屋事件が研究されていないか、いいかえると事件関係者の文書や記録

が読まれていないかを痛感したことがある。

それは主要人物の名前の「ルビ」の混乱である。池田屋事件のきっかけになったのは、京都・四条小橋西詰真町の桝屋喜右衛門こと古高俊太郎の逮捕であった。その「古高」という名前。書物によって、ふられるルビは「こたか」、「ふるたか」と分かれる。読者のみなさんは、何と読まれていますか。

正しくは「ふるたか」である。なぜわかるか。戦前に編纂された、滋賀県栗太郡教育会編『殉難国士古高俊太郎伝』という書物。この巻末に古高俊太郎宛の四十六通の書翰が掲載されている。この宛先を見ると「古高」のほかに、「婦留高」「婦留多荷」「婦流高」「経鷹」というのがある。すなわち「ふるたか」なのだ。江戸時代は現在とちがって文字の当て字があたりまえであった。たとえば木戸孝允が自叙伝のなかで坂本龍馬を「良馬」と記している。このおかげでわれわれは、当時の人物の正確な読みを知ることができるのだ。しつこいようですが、大河ドラマ「新選組！」では正しく「ふるたか」と呼ばれていた。

ところが、信用度の高い人名辞典のひとつ、日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、一九七九年初版）には「こたか」とされている。「ふ」の項には「古高俊太郎」の名は見出せない。ほかにも専門研究者の著作に「こたか」とルビがふられたものがある。

単なるルビと思うなかれ。いかにこの人物が歴史研究の業界から関心を持たれていない

かがわかる。くりかえしになるが、古高宛の文書がていねいに読まれていれば、誤読はありえない。つまり彼の伝記や関係文書をほとんど誰も読んでいないのだ。研究がはじまるわけがない。

本書は主として長州側からの視点によって池田屋事件を論述するが、もちろん新選組やその上部組織会津松平家側からの視点も無視してよいわけはない。新選組については、二〇〇四年のNHK大河ドラマ「新選組！」放映を契機に、松浦玲氏・宮地正人氏などのすぐれた成果が世に送られた（『新選組』、『歴史のなかの新選組』、ともに岩波書店）。これにより新選組はようやく学術研究の対象になったと評価が高い。

ここで松浦氏は池田屋事件を詳述されなかったが、近藤勇の政治姿勢変化の画期が本事件にあると看破し、ゆえにその解明が必要と述べた。宮地正人氏も『歴史のなかの新選組』では池田屋事件をとりあげることは少なかったが、一・会・桑権力を論じられた先駆的研究では、その権力確立を池田屋事件に求められている（「幕末過渡期国家論」佐藤誠朗・河内八郎編『幕藩制国家の崩壊』〈講座日本近世史八〉、有斐閣、一九八一年、一一八頁）。それが妥当かどうかの検討は直接的にはどなたもなされていないようである。

池田屋事件をここでとりあげるのは、以上のような理由からである。

ご関心をお持ちくださると幸いです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com